

遊びのスクランブル交差点(3)

開店したおみせやさんごっこ

仲 明子

◇ 開店したおみせやさんごっこ

NとCがやって来る

C おばちゃん、あいたよ れすとらん。

二人の後について 六畳に行ってみる。

私 あー私 お金を持っていないの。Yちゃんの子どもになるう。Yおとうさん、れすとらんに連れてって。

Y えー 少し驚いて つぎに にこにこして いいよ。

財布を持ったYと私は手をつないで れすとらんに行く。

NとC いらっしやいませ。

メニューの書いてあるノートを出す。Cのメニューの書いてあるページを見せる。

私 えーと、私はハンバーグとそれにプリン できますか。

C はいはい、ハンバーグとプリンですな。

Nのメニューの書いてあるページを見せる。

私 Yおとうさん、何にする？

Y なんでもいい。あー、じゃあ これ。

私 カレーライスね それにブロッコリーのにもお
いしそうだからたのみましよう。それでいい？

Y うん。

N はいはい。カレーライスとブロッコリーのにもので

すね。あー いそがしい。

私 おいくらですか。

NとC あとでいいか

ら。じゃあ つくる

からね。できたら

呼びにいくよ。

私 じゃあ できたら

呼んでね。

「おやすみです」の看板を出して始まったおみせやさんごっこは、長かった「おやすみです」



▲ままごとの棚には、レジ、電話、お金のカン、財布の箱、切符のひき出しなども並んでいる。棚は、文庫本棚に白いペンキを塗って、私たち二人からNへの四歳の誕生日のプレゼント。

もやっと終わり、おみせはつきつきに開店した。

子どもたちがこの遊びを「おみせやさんごっこ」と名付けたとき、私がこの遊びに抱いたイメージは、お金を持って売り買ひするものだった。

だから、「れすとらん」のお客になった私は、注文した後で、「おいくらですか。」とたずねた。ところが、NとCはそのことにはまるで関心を示さなかった。

私は、予想していなかった「あとでいい。」の一言から、二人が私からお金をもらうこと——「売る」こと——を楽しもうとはしていないことを知らされた。

二人は「いそがしい、いそがしい。」「あー いそがしい。」と口々に言いながら、各々が注文を受けた料理をつくり始めた。そのうれしそうな様子を見たとき、私は二人が各々にままごとのお母さんの役を楽しんでいることに気づかされた。

NとCのれすとらんどだけでなく、別のおみせのお客になって買い物しようとしたときにも、私はびっくりしたり不思議に思ったりすることにたびたび出会った。

そんなとき、私は、彼らの楽しみが「売る」こととは別のところにあるのではないかと思わされるのである。

では、彼らは、この遊び——開店したおみせやさんごっこ——の中で、どんなことを楽しもうとしているのであろうか。

それを、まず、彼らの抱いている「おみせやさんのイメージ」を、私のそれとのずれを手がかりに探ってみよ

うと思う。

つぎにそのイメージを手がかりに、お客になったときの私の疑問を解いていくことで、彼らがどんなことを楽しもうとしているのかを探ってみたいと思う。

◇ 「おみせやさん」のイメージ

(1) 「おかねやさん」に探る

Nと私は毎週水曜日に近所の保育園に遊びに行く。ある雨の日、Nと私は四歳児の部屋で、つぎのような「粘土のパンやさんごっこ」に加わった。それは一時間続いた。

部屋に入るとすでに粘土遊びが始まっている。先生が新しくパンやさんになったyの頭に合わせて、画用紙を筒状に丸めて帽子をつくっている。mとdとnはすでにその帽子をかぶっている。三人の粘土板の上には、いろいろなパンが並んでいる。

tは先生の横で自分の帽子を自分でつくっている。Nと私は粘土板を借りて空いている椅子に座る。

m パン。と私にねじりパンを差し出す。

私 はい、おかね。と粘土を丸めて渡す。

d それを見て なにがほしい？ チョコレートパン？
と差し出す。

私 はい おかね。と急いで造って渡す。

y パン。と渡し おかね ください。

私 はい。と造って渡す。

y もっと ください。

私 はい。と造って渡す。

y 私の横に来て 造る傍らからおかねを持っていく。

d yちゃん ずるーい。

y yちゃん もう おかねやさん と粘土板に、手に

入れたおかねを並べる。

別の所で遊んでいたk, h, sがつきつきにやって来る。

k おかね ちょうだい。

私 はい。と渡す。

k 部屋のすみに持って行って、プリンのカップに並べる。

h おかね ちょうだい。

私 はい。

h もらって、kのいるすみへ持って行く。

k おかね ちょうだい。

私 はい。ためているの？

k うん

h どろぼうなの わたしたち。

三人でひそひそと額を寄せ合う。

初め、彼女たちは自分のイメージするパンを造ることを楽しんでた。フランスパン、ねじりパン、チョコレートパン、ハンバーガーと、彼女たちの手からはつきつきとパンが造り出され、粘土板に並べられていった。ひとりひとりが自分のイメージを形にすることに満足している様子が、新しく加わった私にも伝わって来た。彼女たちは大好きなパンをたくさん並べたパンやさんになろうと、ひとりひとりパン造りに励んでいた。

ところが、私がパンと交換に差し出したお金が、その場の雰囲気さがらりと変えた。彼女たちの関心は、気に

入ったパンを造ることから「お金をたくさん持つこと」へと移ってしまった。

それは、パンとの交換なしに造る傍らからお金をもぎとっていくyへの「ずるい」の抗議の声にも、それに対する「yちゃん もう おかねやさん」の言葉にも表れている。

yは、自分にとっての魅力あるもの——おかね——をたくさん持っている人のことを「おかねやさん」という言葉を使って表した。

子どもたちにとって、大好きなパンをたくさん持っている人が「パンやさん」なら、大好きなお金をたくさん持っている人は「おかねやさん」なのである。

yは「おかねやさん」を宣言したことで、その場にあるお金をたくさん自分の粘土板に並べる——占有する——ことが許されると思った。その一言で、自分の気持ちを正当化しようとした。

一方、お金がほしくて後から加わったhらは、お金を部屋のすみに持って行って、密かにためようとした。彼

私たちはその気持ちを「どろぼうなの」という言葉で表した。

このように、彼女たちは、大好きなお金を占有したい気持ちを「おかねやさんになる」「どろぼうになる」という「○○やさんになる」ということで実現しようとし



た。

私は、この遊びに加わったことで、子どもたちがおみせやさんに抱くイメージ——大好きなものをたくさん持つことができる(占有できる)人——に気づかされたのである。

(2) 「ケーキやさんがいいな」に探る

夕食後、壁の補修をしている父を見て、

N N、大きくなったら大工さんになって、そういうのやってみたいな。

私 ふーん Nは 大工さんになりたいの。

N …… N、やつぱり ケーキやさんがいいな。

私 ふーん どうして ケーキやさん？

N だって ケーキをたくさん作って お母さんにあげるの。

私 ありがとう

(N 五歳半)

Nが「大工さんになりたい」と言ったとき、それは父が目の前でやっている壁の補修があまりにもおもしろうなので、そういうことがやってみたのであろう。そんなおもしろうなことができる大工さんになって、自分もやってみたいなと思ったのであろう。

それは他人の住む家を建てたいからでも、その代金をもらいたいからでもないのである。

Nが「ケーキやさんがいいな」と言ったのも、ケーキをお母さんにあげたいと思ったからで、未知の他人にそれを売ってお金をもらいたいからではなかったのである。

Nは、「はやく大きくなりたいな。大きくなってお金(自由に)使えるようになったら、お母さんのお誕生日にプレゼント買ってあげる。」とも言ってくれた。

Nは、プレゼントを「あげたい気持ち」を実現できるからはやく大きくなりたいのであり、ケーキを「あげたい気持ち」を実現できるからケーキやさんになりたいのである。

Nはケーキやさんならたくさん作ったケーキは自分のもので（占有できる）、自分の思い通り（自由）になる——自分のあげたい人にあげられる——と思っている。

この日、私は、子どもたちがおみせやさんに抱くもう一つのイメージ——大好きなものを占有でき、それを自由にすることができる（あげたい人にあげることができる）人——に出会った。

◇ おみせやさんになることを楽しむ

(1) 気に入ったものを占有できることを楽しむ

どうして売らないのだろう。

Yのりのりものは今日は「売らない」と言う。買いに行った私はびっくりして聞く。「だって、Yちゃん、こんなにきれいに並べたじゃない。あいていないの。」けれども、Yはやはり売ってくれないのである。つきつきに並べたのりものを前ににこにこしているのである。



▲ のりものや

Lの誕生以来、いろいろな由来で、一つまた一つと我が家に来た乗り物が、今では一つのバケツに入れられている。

おみせやさんごっこで、子どもたちが「○○やさんになる」と言うとき、大好きな○○をたくさん並べて○○に囲まれていたものである。○○を他の子から占有——ひとりじめ——できるのが「○○やさんになる」ということなのである。

Yはいろいろな車の入ったバケツを選んで「のりものや」になった。もし、これが他の遊びの中だったら、たちまち「ずるーい」と声がかかり、バケツの中の車を分け合って遊ばなければいけない。けれども、今日はそれらを占有することができるのである。

そして、Yはバケツの中から自分のお気に入りの車を一台ずつ選んでは出して、つぎつぎに畳のへりに沿って並べた。それは、Yのそれらの車に寄せるイメージの現れであり、Yにとってそれらのどの一つが欠けても困るのである。

それらは売るために並べられたのではなかった。今日のYは「売らないのりものや」になったのである。

Yはのりものやになったことで、誰にも邪魔されるこ

となく、お気に入りの車を自分の思い通りにできること——占有できること——を楽しむことができたのである。

(2) あげたい気持ちを実現させることを楽しむ

どうしておつりの方が多いのだろう。

食べ終わって、レジの前にいるNに、

私 どうも ごちそうさま。おいしかったわ。おいくらですか。

N 少し考えて 百円。なかったら千円でもいいです。

私のお金入れをのぞき込み、あ、二百円でもいいです。貸して。と私の手から百円玉二枚を持っていく。

N えーと。私の手に千円札をつぎに十円玉を二つと五円を一つ握らせる。はい。

私 これ おつりなの？

N うん。

私 どうも ありがとう。

C はい、おつりです。

N はい、これ おまけです。

C はい、これも おまけです。

どうして ただ なのだろう。

きれいなものの好きなOは、今日はきれやさんになって、いろいろな模様のついでに、きれを自分の思い通りに並べた。

O おばちゃん、きれやさ
ん あいたよ。

私 そう。じゃあ、どれに
しようかな。じゃあ、
これとこれ、それにこ
れもいいわねえ。これ
だけ全部でおいくらで
すか。

O ただ でいいよ。は



い、これおまけ。
私 えー。ただなの？ どうして？

子どもたちが「おみせやささんっていいな。」と言うとき、それは、そのおみせにあるたくさんのおまけは全部自分のもので、あげたい人にあげることができると思って

▲ 「きれ」の箱を選んで、Nはきれやさんになった。箱の中には、一枚ずつミシンでまわりを縫った十八センチ四方の端ぎれが三十六枚入っている。私の妹からNへの三歳の誕生日のプレゼント。

いるのである。

六畳のおみせやさんごっこでも、子どもたちは、お客になった私に実にいろいろのものをくれた。

NとCは、お料理をごちそうしてくれた上に、おみせのレジから代金より多いおつりを二人で競うように私の手に握らせてくれたし、大事にしているへび笛やスーパーボールまでおまけにくれたのである。

きれやさんになったOも同様である。いろいろ選んで「買った」私にそれらの代金を払わせてくれない上に、おまけのきれまで私の手の中へ押し入れてくれたのである。

それらを両手いっぱい抱えて、私は入るとき的气氛——買い物をする——とは違う気持ち——プレゼントをもらった——を抱いておみせを出るのである。

彼らは、自分が気に入っているものを自分で大事に持っていたい気持ち——Yののりものやのように——を持っていて。一方で、それを誰かにあげて喜んでもらいたい気持ち——あげたい気持ち——も持っているのである。

る。

そんなとき、一人で味わっているその気持ち——大事に思う気持ち——を二人で共有しようと言うかのようになり、それらを手渡してくれる。

とりわけ、大好きな相手には、いっぱい「あげたい気持ち」で満ちているのである。

その日、彼らはおみせやさんになることで、大好きな相手にいろいろとあげることができた。そして、「あげたい気持ち」を十分に満足させることができた。

彼らはあげたい気持ちを實現させることを楽しんでいたのである。

*

このように、開店したおみせやさんごっこでは、私のイメージする売り買いを楽しむ姿はあまり見かけなかったけれど、彼らは自分のイメージする「おみせやさん」になり、各々に十分に楽しみ、満足している様子だった。

た。

彼らは、互いのおみせの様子を「見る」ことで刺激され合ってもいた。「○○ちゃんの××やさん、おもしろそう。明日はあれになるう。」と帰って行くこともあったし、「おぼちゃん、今日は○○やさん。」とやって来るなり言うこともあった。

日を経るに従って、六畳での遊びは当然「おみせやさんごっこ」であり、その日の遊びのために何か準備したものを持って来ることもあった。

今まで身近に接することの少なかった者同士が同室して、安心感に支えられて隣り合い、互いにおしゃべりしながら自分らしさを見せ合うことで刺激され、そうして日々かわって遊び続けることで、互いを知るチャンスも生まれてくる。そんな彼らの中に、少しずつではあるが、かわりを持ちたい気持ちが出てきているように思う。

それは、彼らが互いになじんでいく過程でもあると思う。

さらに、それは、彼らが（おもちゃや特定の少数の友だちと遊ぶ楽しさだけでなく）、遊びの場が集まって来た不特定で多数の友だちと群れて、ダイナミックに遊ぶ楽しさを知ることに通じるものでもあると思う。

私は、この遊びが、そんな遊び方に少しずつなじんでいく過程にもなっているように思った。

（舞々同人）